

国内希少野生動物植物種に追加する種の概要

種名 (学名)	指定要件*	指定理由 (生息状況等)
<p>マルコガタノゲンゴロウ (<i>Cybister lewisianus</i> : キュビステル・レウイスミアヌス)</p> <p>分類： コウチュウ目 ゲンゴロウ科</p>	<p>イ・ウ・エ</p>	<p>①種の特徴：体長21～26mmで体型は卵型。背面は暗緑色～褐色で光沢があり、翅にオレンジ色の縁取りがある。平野部～丘陵部の、貧栄養で植生の豊富な比較的大きなため池に生息する。成虫で越冬し、産卵は5～6月に行われ、幼虫・蛹を経て新成虫は8～10月に出現する。成虫は2年以上生存する。</p> <p>②分布域：本州、九州の各地に生息していたが、多くの生息地で絶滅し、東北地方、北陸地方、九州のごく一部にのみに残存する。朝鮮半島からインド北東部に分布。</p> <p>③個体数：数千個体(推定)(国内)</p> <p>④減少要因：水質汚染等による生息環境の変化及び土地改変等による生息地の減少・消失、昆虫業者や愛好家による採集圧、アメリカザリガニ等の外来種による幼虫の捕食や、水生植物・餌生物の捕食など直接的・間接的な影響等。</p>
<p>フチトリゲンゴロウ (<i>Cybister limbatus</i> : キュビステル・リムバトウス)</p> <p>分類： コウチュウ目 ゲンゴロウ科</p>	<p>ア・イ・エ</p>	<p>①種の特徴：琉球列島最大のゲンゴロウで、体長は33～39mm。背面は緑色を帯びた暗褐色で光沢がある。水質汚染がなく人工護岸がなされていない良好な水辺環境に生息する。新成虫は9月頃出現し、水中で越冬後、5～7月ころに交尾・産卵するものと推定される。寿命は不明だが、多くの場合1年程度と考えられる。</p> <p>②分布域：琉球列島に広く生息していたが、多くの生息地で絶滅し、ごく限られた地域に残存する。また、本種は南方系の昆虫で、南西諸島は分布の北限にあたる。国外では中国、インドネシア、タイ、ラオス、インド、台湾、フィリピンなどが知られている。</p> <p>③個体数：不明(ごく少数)(国内)</p> <p>④減少要因：植生遷移による生息環境の変化及び土地改変等による生息地の減少・消失、昆虫業者や愛好家による採集圧等。</p>
<p>シャープゲンゴロウモドキ (<i>Dytiscus sharpi</i> : デュティスクス・サルピ)</p> <p>分類： コウチュウ目 ゲンゴロウ科</p>	<p>イ・ウ・エ</p>	<p>①種の特徴：体長28～33mm。オスは長卵型、メスは卵型。雌雄とも背面はわずかに緑色を帯びた黒褐色である。生息地は泥深く湧水がある自然の池や湿地である。交尾期は10～4月で、3～4月に水生植物に産卵し、約2週間で孵化する。幼虫は約1ヶ月で上陸し、岸辺の土中で蛹となり、5～7月には新成虫となる。寿命は約1～3年。</p> <p>②分布域：本州にのみ生息する日本固有種。関東以西の本州に点々と生息していたが、多くの生息地で絶滅し、関東地方、中部地方のごく一部にのみに残存する。</p> <p>③個体数：数百個体～数千個体で多くとも2,000個体に満たない程度と推定。</p> <p>④減少要因：水質汚染等による生息環境の変化及び土地改変等による生息地の減少・消失、一部の昆虫業者や愛好家による採集圧、アメリカザリガニ等の外来種による幼虫の捕食や、水生植物・餌生物の捕食による間接的な影響等。</p>

種名 (学名)	指定要件※	指定理由 (生息状況等)
<p>ヨナグニマルバネクワガタ (<i>Neolucanus insulicola</i> <i>Donan</i> : ネオルカヌス・ インスリコラ・ドナン)</p> <p>分類： コウチュウ目 クワガタムシ科</p>	ア・エ	<p>①種の特徴：体長35～60mmほどの日本産の中で最も大型になるクワガタムシの一つ。体は黒褐色で、オスは発達した大顎を持ち、体型は太短く丸味を帯びる。成熟したスダジイを主体とした自然林を中心に生息し、幼虫は大木にできたウロ（樹洞）の中や根際に溜った腐植質を食べて育つ。成虫になるまでに3～5年を要する。成虫は10月中旬～11月上旬にかけて出現する。</p> <p>②分布域：八重山諸島与那国島だけに分布する。島内の生息地は4ヵ所が知られていたが、2010年の調査で生息が確認されたのは1ヵ所のみであった。</p> <p>③個体数：500個体以下（推定）</p> <p>④減少要因：繁殖に適した樹洞を持つ大木のスダジイ林伐採による生息地の減少、販売目的の採集圧等。</p>
<p>ヒョウモンモドキ (<i>Melitaea scotosia</i> : メリ タエア・スコトスィア)</p> <p>分類： チョウ目 タテハチョウ科</p>	イ・エ	<p>①種の特徴：前翅長22～34mm、表面の地色は雌雄によって異なる。翅裏の斑紋は黒斑が強く特異である。主に山地の湿性草原に生息する。成虫は年1回出現する。幼虫はキク科のアザミ類の葉肉部を食べて成長し、8月頃休眠に入り、越冬後、再び餌を食べ、5月頃蛹になる。</p> <p>②分布域：福島県以西の本州に点々と生息していたが、多くの生息地で絶滅し、中国地方のごく一部のみに残存する。国外では中国北部～中部・東北部、アムール、朝鮮半島に分布している。</p> <p>③個体数：不明（生息地数は30ヵ所程度）（国内）</p> <p>④減少要因：土地改変等による湿性草原の減少、水田周辺の小規模な湿地の減少、昆虫業者や愛好家による採集圧等。</p>

#### ※選定要件について

○希少野生動植物種保存基本方針(平成4年総理府告示第24号) (抄)

#### 第二 希少野生動植物種の選定に関する基本的な事項

##### 1 国内希少野生動植物種

(1)国内希少野生動植物種については、その本邦における生息・生育状況が、人為の影響により存続に支障を来す事情が生じていると判断される種（亜種又は変種がある種にあっては、その亜種又は変種とする。以下同じ。）で、以下のいずれかに該当するものを選定する。

ア その存続に支障を来す程度に個体数が著しく少ないか、又は著しく減少しつつあり、その存続に支障を来す事情がある種

イ 全国の分布域の相当部分で生息地又は生育地（以下「生息地等」という。）が消滅しつつあることにより、その存続に支障を来す事情がある種

ウ 分布域が限定されており、かつ、生息地等の生息・生育環境の悪化により、その存続に支障を来す事情がある種

エ 分布域が限定されており、かつ、生息地等における過度の捕獲又は採取により、その存続に支障を来す事情がある種